

寄稿エッセイ

スプリングエフェメラル

北村 豊



日本語には同意語はないと思うが、この単語が私は好きである。

一般的には厳しい冬を乗り越えて、落葉した森林の日光がまだ十分に届く明るい林床で、春がとても待ち遠しかったかのように、一斉に花を咲かせる植物たち“のことである。

「命」や「春のはかなきもの」、さらには「春の妖精」とも訳されるが、それだけでは、皆さんの脳裡にイメージ

代表的な植物として、長野では近くの山林でもよく見られるイチリンソウやニリンソウ、フクジュソウ、ムラサキケマンや、ギフチョウ属の吸蜜植物としてもよく知られるカタクリなどがある。

これらは落葉広葉樹林帯に生育する小柄な草本の植物は、早春に花を咲かせ、日光を遮

る木々の葉が大きくなるという夏の短期間に、林床にまで差し込む太陽光を利用して、光合成を十分に

一般的であるが、春のみ成虫となる、一年性の蝶のこともそのように呼ばれることもある。

私も、これらの「春の妖精」に大自然の中で直接に出会える喜びを毎年、とても心待ちにしている。きっと長野の冬は寒さが厳しく、それに耐えてやってくる春だからなおさらなのだろう。さらには、我が家は「冬は冷房、夏は暖房付き」の住宅であることも春の動植物に出会った時の喜びを増幅してくれているのではないだろうか。

故郷の奈良で過ごした中学生時代に、ギフチョウの研究で日本学生科学賞に個人部門で入選したこともあり、春の妖精は私を大自然の不思議な世界へと引きずり込んでくれた。豊かなものにしてきたきっかけになったともいえる。

スプリングエフェメラルが「死んだ化石」にならないことを願って筆をおくこととする。

(信州口腔外科インプラントセンター所長 上高井郡小布施町)